

## 子どもの頃の組織的キャンプ経験と現在の野外活動経験

○吉原 さちえ (東海大学) 西野 仁 (東海大学)

### I. はじめに

文部科学省は、1999年に生活体験や自然体験は、子どもたちの成長の糧であり、『生きる力』を育む基盤になると提示した。そこでは『生きる力』を、自分の力で問題を発見したり、解決したりする能力や物事を判断する能力、他人との協調性や他人を思いやる心、感動する心などの豊かな人間性のことであると捉えている。1998年に子どもの体験活動等に関するアンケート調査が実施され、その結果は、自然体験が豊富な子どもほど道徳感や正義感があるということであった。だとすれば、今後我が国で子どもたちに自然体験を進めていくためには、自然の中で様々な体験をし、友人と一緒に寝食をともにする活動であるキャンプにまず着目すべき必要があると考えた。しかし、一口にキャンプと言っても、家族や友人同士で行うもの、YMCAやYWCA、ボーイスカウトやガールスカウトなどが行うもの、学校やその他の教育機関で行われるものなど様々なものがある。そこで我が国では、キャンプの専門家であるキャンプディレクターを中心に、プログラムを作成し組織的に行うキャンプを組織的キャンプと称し、他のキャンプと区別してきた。組織的キャンプとは、子どもたちにとって理想的な学習の場であるとされ、子どもに自立性や協調性をもたらし、楽しい自然活動を通じて、自由時間を過ごすための技術や方法を教えるキャンプであるとされている<sup>1)</sup>。このように、教育的要素を含む組織的キャンプ経験が、その後の野外活動経験、とくに成人してからの野外活動経験にどのような影響を及ぼすのかきちんと捉えておくことが、これから子どもたちに自然体験を推し進めていくことに必要不可欠であると考え、本研究にとりかかった。

### II. 研究の目的と方法

#### 1. 研究の目的

日本には、キャンプや自然体験、野外活動体験が子どもに及ぼす「影響」について研究は数多くある。しかし、いずれも経験直後の影響についてばかりである。一方、国外では、Patrick, C.の「Relation of Childhood and Adult Leisure Activities」(1945)、Sofranko, A.J. and Nolan, M.F.の「Early Life Experiences and Adult Sports Participation」(1972)、Yoesting, D.R. and Burkhead, D.L.の「Significance of Childhood Recreation Experience on Adult Leisure Behavior: An Exploratory Analysis」(1973)となどの子どもの頃のキャンプや自然体験、野外活動体験が成人してからの活動経験にまで長期的に影響するとした研究がある<sup>2)3)4)</sup>。このようなことから、子どもの頃の野外活動経験が成人してからの野外活動経験にどのような影響を及ぼすのかを明らかにしたいと考えた。しかし、「影響」を明らかにするには、容易ではない。そこで、まずこの研究の第一歩として、子どもの頃の組織的キャンプ経験の有無により大人になった現在の野外活動経験に「差」があるかどうかを検証した。その結果、野外活動経験の継続性、野外活動の種目数、野外活動・野外教育に対する意識について子どもの頃の組織的キャンプ経験の有無に「差」があるということが明らかになり、2002年に開かれたこの学会で発表を行った<sup>5)</sup>。今回は、その続編であり、昨年の研究結果からさらに分析を進め、子どもの頃の組織的キャンプへの参加の程度による「差」はないかということを検証することが目的である。

## 2、研究の方法

本研究では、1985年から現在まで毎年夏と冬に継続して開催している「S キャンプ」に1986年から1995年の10年間に参加したことのある当時の小学生（調査当時18才～29才）を「組織的キャンプ経験者」とした。一方で、小学生時代に組織的キャンプに参加したことがないと自己申告した組織的キャンプ経験者と同年代の友人や知人を「組織的キャンプ未経験者」とした。「S キャンプ」とは、野外教育が専門である大学教員を中心に企画・運営され、リーダーの役割やプログラムが、組織的・計画的に実施され、教育的な要素も備え持つ我が国の一般的な組織的キャンプである。

### 1) 調査対象、調査期間、調査方法

調査対象は、1986年から1995年の10年間にS キャンプの参加者名簿に記載があり当時小学生だった全キャンパー502名（調査当時18才～29才）と前述の「組織的キャンプ未経験者」である。

調査期間は、2002年9月17日から9月30日までとした。

調査方法は、郵送法によるアンケート調査である。調査用紙の配布は、組織的キャンプ経験者502名に「組織的キャンプ経験者用」と「組織的キャンプ未経験者用」の両方を送付し、「組織的キャンプ経験者用」には、自分自身で記入し、「組織的キャンプ未経験者用」は、該当する友人や知人に配布し記入後、回収するように依頼した。送付した502名のうち、142名には、転居先不明・宛名先不明などにより、調査用紙が届かなかった。調査用紙の回収は、調査開始直後から2週間を目安とした。しかし、郵送法ということもあり、回収終了とした9月30日以降も随時調査用紙を受け取った。組織的キャンプ経験者50名から回答を得た。回収率は13.9%であった。この回収率が低いとの印象を与えるかもしれないが、これは小学生時代に組織的キャンプに参加していた当時から現在まで、すでに10年が経過しているので、いたしかたないところもある。また、ある社会調査に関する文献には、「一枚のハガキ程度の分量でも、回答を返送してくれる人は二割足らずというのが普通である。」<sup>6)</sup>と記載されていた。「組織的キャンプ未経験者」の回答は41名であった。しかし、いずれもデータの不完全が目立ち、分析に使用したデータは「組織的キャンプ経験者」が34名、「組織的キャンプ未経験者」は23名であった。

### 2) 組織的キャンプへの参加回数によるデータのグループ化

組織的キャンプ経験者34名の小学生時代の組織的キャンプへの参加回数は、範囲が1～20回、平均が7.35回であった。そこで、平均参加回数を基準とし、小学生の頃の組織的キャンプへの参加回数が「8回以上の経験者」と「7回以下の経験者」に分け、次のようにグループ化した。

「8回以上の経験者」14名（24.5%）：小学生時代にS キャンプへの参加回数が8回以上の経験者  
「7回以下の経験者」20名（35.1%）：小学生時代にS キャンプへの参加回数が1～7回の経験者  
「未経験者」23名（40.4%）：小学生時代に組織的キャンプに参加した回数が0回

## III. 結果および考察

### 1、現在行っている野外活動種目数

現在行っている野外活動種目数については、図1のような結果となった。図1から、子どもの頃の組織的キャンプへの参加経験の程度が高い者は、現在も多くの野外活動を行っていることが言える。とくに子どもの頃に8回以上組織的キャンプに参加したことのある者と未経験者の間には、はっきりと現在行っている野外活動種目数に「差」が見られた。

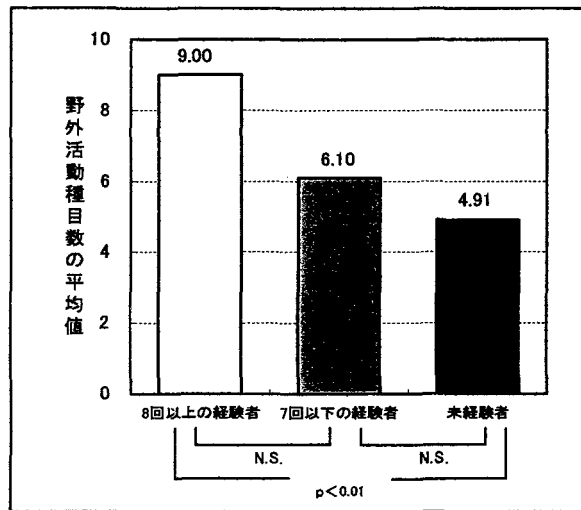


図1: 現在の野外活動種目数

## 2、野外活動種目別による現在の参加経験の有無と参加率

子どもの頃の組織的キャンプ経験の参加の程度におけるスキndaイビング・シュノーケリング活動とアウトドアクッキング活動の現在の参加経験の有無と参加率は、表1・表2のとおりになった。子どもの頃に組織的キャンプへ8回以上参加しているものは、現在もこの二つの活動に参加しているものが多い結果となった。

表1: スキンダイビング・シュノーケリング活動

	経験あり		経験なし	
	(人)	(%)	(人)	(%)
8回以上の経験者	6	42.9	8	57.1
7回以下の経験者	5	25.0	15	75.0
未経験者	1	4.3	22	95.7

$p < 0.05$

表2: アウトドアクッキング活動

	経験あり		経験なし	
	(人)	(%)	(人)	(%)
8回以上の経験者	14	100.0	—	—
7回以下の経験者	12	60.0	8	40.0
未経験者	12	52.2	11	47.8

$p < 0.01$

## 3、野外活動・野外教育に対する意識と自分自身の子どもに対する野外教育の考え方

図2・図3は、野外活動・野外教育に対する意識と自分自身の子どもに対する野外教育の考え方について、5段階評価をしたものである。図2は、子どもたちの成長に必要な場であるかどうかを質問したものである。組織的キャンプに参加した経験が多いものほど、「子どもたちの成長に必要な場である」と実感しているようである。図3においても、子どもの頃に組織的キャンプに8回以上参加した経験のある者は、自分自身の子どもに対して「何らかのキャンプに参加させたい」と考えているものが多いことが伺える。

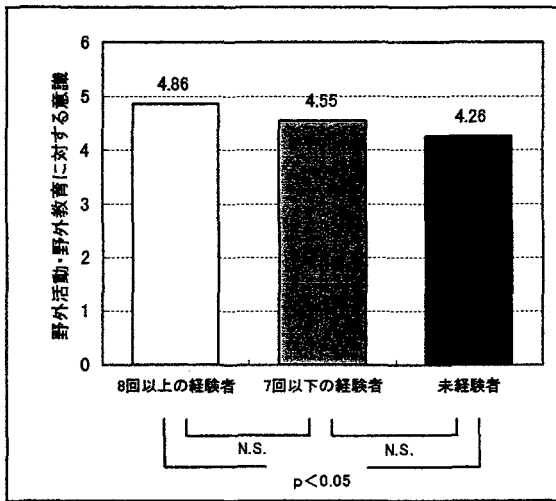


図 2: 子どもたちの成長に必要な場である

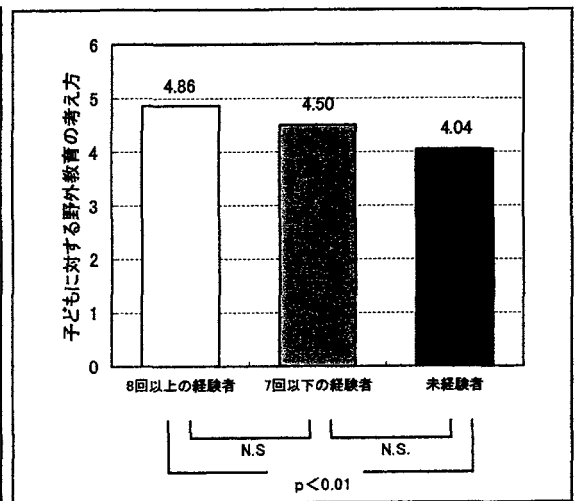


図 3: 子どもを何らかのキャンプに参加させたい

#### IV. まとめ

これらの結果から、子ども頃に組織的キャンプへの参加の程度が高い者は、現在も多くの野外活動を経験し、子どもの頃に行った野外活動をしている。また、野外教育・野外活動の教育的な要素に対して期待や意識が強く、子どもの教育に野外教育や野外活動を取り込みたいと考えている傾向が見られた。つまり、子どもの頃の組織的キャンプへの参加の程度により、現在の野外活動経験に「差」があることが明らかになった。

#### V. 今後の研究の進め方

今後は、本研究で明らかになった子どもの頃の組織的キャンプへの参加経験の有無や参加の程度による現在の野外活動経験の「差」がどのような理由によるものなのかを探りたい。その「差」が組織的キャンプに参加したこと強く影響を受けている「差」なのか、それとも、社会的要因、経済的要因が関係しての「差」なのかなどが具体的に明らかになり、さらに組織的キャンプに参加したこと「影響」を論ずる手がかりが得られるのではないかと考える。本研究の調査で得られたデータが少なかったことから、今後この研究を進めていくにあたり、データを増やすための工夫をしていきたい。

#### 参考文献

- 1) Mitchell, A. V. and Crawford, I. B. 共著 兼松保一訳「キャンプ・カウンセリング」(ベースボール・マガジン社, 1966, pp.35-39)
- 2) Patrick, C. 「Relation of Childhood and Adult Leisure Activities」(Journal of Social Psychology, 1945,21,pp.65-79)
- 3) Sofranko, A.J. and Nolan, M.F. 「Early Life Experiences and Adult Sports Participation」(Journal of Leisure Research, 1972, Vol.4, pp.6-18)
- 4) Yoesting, D.R. and Burkhead, D.L. 「Significance of Childhood Recreation Experience on Adult Leisure Behavior: An Exploratory Analysis.」(Journal of Leisure Research, 1973, Vol.5, pp.25-36)
- 5) 吉原・西野「活動歴とレジャー経験—小学生時代の野外活動経験の有無による比較—」(レジャー・レクリエーション研究, 第 49 号, 2002, pp.24-25)
- 6) 飽戸 弘著「社会調査入門 調査を生かす 12 章」(日経新書, 1975, p.29)